The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	肺癌の予後決定因子に関する研究
Author(s)	中村, 憲二
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37474
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【76】

氏名・(本籍)	中村憲二（なかむらけんじ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 9367 号
学位授与の日付	平成2年10月5日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**肺癌の予後決定因子に関する研究**
論文審査委員	(主査) 教授 川島 康生 (副査) 教授 田口 鐵男　教授 北村 幸彦

論文内容の要旨

〔目　的〕

肺癌例について予後予測因子としては腫瘍の局所における進展（T），リンパ節転移度（N），および遠隔転移（M）という因子が大きな比重を占めている。すなわち，リンパ節の形態については転移の有無が大きな比重を占めている。一方，リンパ節は免疫反応の場でもあり，反応性を形態学的にとらえる試みも少なくない。しかしその評価に見解の一致をみていない部分も多い。この形態学的な反応性に注目し，他の予後因子との関連性を解析することで，臨床的に使用可能なパラメータを設定することを目的として検討をおこなった。

〔対象ならびに方法〕

肺癌自験１３７例（前期：８７例，後期：５０例）について，前期例ではリンパ節の形態学的変化から予後との関連およびスコア化の導入のための解析，後期例では，そのスコアとリンパ球亜群との関連についての解析をおこなった。縦隔リンパ節の形態学的変化はＨＥ標本により①ＳＨ（sinus histiocytosis）②ＰＣ（Paracortical lymphoid hyperplasia），③ＧＣＨ（germinal center hyperplasia），④ＦＢ（fibrosisに代表される退行性変化）につき陽陰性の２段階評価を行った。関連性を検討したパラメータは腫瘍側の因子は，組織型と術後病期で，宿主側の因子として年齢，性別，のほかに免疫に関連する因子としてツ反応，ＤＮＣＢ反応，末梢血リンパ球数，末梢血リンパ球Ｔ細胞亜群，リンパ節リンパ球Ｔ細胞亜群を用いた。これらをもとに予後因子としての意義を検討した。

〔成　績〕

前期例について以下の成績を得た。

(1) 単独の反応性としてはＳＨ陽性例が陰性例に比し，ＦＢ陰性例が陽性例に比し有意に予後が優っていた（p＜0.01）。

(2) 反応性相互の関連でＳＨ－ＦＢ，ＰＣ－ＧＣＨに有意の逆相関がみられた（p＜0.05）。

(3) ＳＨ陽性，ＰＣ陽性，ＧＣＨ陰性，ＦＢ陰性を各１点としＡ群（４点），Ｂ群（３点），Ｃ群（２点），Ｄ群（１点）の序列化スコアを作成した。

（３－ⅰ）この群別の予後は５年生存率でＡ群：１００％，Ｂ群：８１.４％，Ｃ群：３３.１％，Ｄ群：４２.７％，の順になり，ＡＡ群あるいはＢ群と，Ｃ群あるいはＤ群との間に有意差（p＜0.01）を認めた。

（３－ⅱ）皮膚反応陽性率（ツ反応，ＤＮＣＢ反応陽性率）で有意差を認め得なかった。

（３－ⅲ）平均年齢は段階的にＡ群：５４.０，Ｂ群：５６.２，Ｃ群：６１.３，Ｄ群：６６.２であり，Ａ群とＣ群との間，Ｂ～Ｄ群の各群間に有意差（p＜0.05）を認めた。

(4) 生存率の結果よりＧ群（Ａ群＋Ｂ群），Ｐ群（Ｃ群＋Ｄ群）に再分類した。Ｇ群は生存率（p＜0.001），生存曲線（p＜0.001）でＰ群のそれを凌いでいた。

後期例について以下の成績を得た。

(1) リンパ節から得たリンパ球亜群のＣＤ４／ＣＤ８比は病期の進行に従い漸減しⅠ期，Ⅲ期間で有意差（p＜0.05）を認めた。

(2) Ｇ群のＣＤ４／ＣＤ８比値は，Ｐ群にくらべ有意に高値を示した（p＜0.05）。

〔総　括〕

(1) 肺癌例のリンパ節の形態学的な反応性より臨床的に使用可能なパラメータの設定を目的として，肺癌自験１３７例について，縦隔リンパ節のＨＥ標本によりＳＨ，ＰＣ，ＧＣＨ，ＦＢの４因子について陽陰性の２段階評価と，末梢血とリンパ節とのリンパ球亜群の測定をおこなった。

(2) ＳＨ陽性，ＰＣ陽性，ＧＣＨ陰性，ＦＢ陰性を各１点としてＡ（４点），Ｂ（３点），Ｃ（２点），Ｄ群（１点）の序列化スコアを作成し，Ａ群ｏｒＢ群とＣ群ｏｒＤ群に予後の差異を認め，年齢という背景因子を得た。

(3) 生存率の結果よりＧ群（Ａ群＋Ｂ群），Ｐ群（Ｃ群＋Ｄ群）に再分類し，予後の顕著な差異を認めた。

(4) リンパ節リンパ球のＣＤ４／ＣＤ８比はまたＧ群＞Ｐ群であった。

(5) 以上より，Ｇ／Ｐスコアは予後決定因子であり，その背景として年齢，リンパ節リンパ球ＣＤ４／ＣＤ８比という，免疫応答能あるいは，それと密接に関連をもつパラメータを有していると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は肺癌手術患者における縦隔リンパ節の免疫反応を形態学的に分類し，これと予後との関連を検討したものである。

その結果，この形態学的変化をスコア化し，その点数によって２群に分けたところ，両群の予後の間に有意の差を認め，又リンパ節リンパ球の検索でＣＤ４／ＣＤ８比も両群の間に有意差を認めている。

この知見は肺癌手術例において，縦隔リンパ節の免疫反応が予後判定に役立つ可能性のあることを示唆したものである。